



国連人口基金 (UNFPA) 親善大使 有森裕子さん:ベトナムにて、JBIC、JICA、 UNFPA 事業などを視察

有森 裕子さん

1966年岡山県生まれ。就実高校、日本体育大学を卒業して、(株)リクルート入社。バルセロナオリンピック、アトランタオリンピックの女子マラソンでは銀メダル、銅メダルを獲得。2007年2月18日、日本初の大規模市民マラソン『東京マラソン2007』で、プロマラソンランナーを引退。1998年NPO「ハート・オブ・ゴールド」設立、代表就任。2002年4月アスリートのマネジメント会社「ライツ」設立、取締役就任。現在、国連人口基金親善大使、日本陸連女性委員会特別委員、国際陸連 (IAAF) 女性委員、ほか。米国コロラド州ボルダー在住。

視察事業

貧困地域小規模インフラ整備事業 (円借款)	貧困地域として選定された省を対象に、道路、配電、給水、灌漑等の小規模インフラ施設を整備し、地方・農村部の生活水準の向上をはかる事業。省道433号、434号、フォンマオ灌漑を視察。
紅河橋 (タインチ橋) 建設事業 (円借款)	ハノイ市内を流れる紅河に、三番目となる橋と付随する道路 (アプローチ道路) を整備し、ハノイ市内を含むベトナム北部地域の物流の効率化をはかる事業。橋およびアプローチ道路を視察。
国道5、10、18号線改良事業 (円借款)	首都ハノイをハイフォンを結ぶ国道5号線、首都ハノイ (ノイバイ空港) から景勝地ハロン湾を經由し中越国境までを結ぶ国道18号線、この国道18号線上のピチョーを起点に紅河デルタ南部の主要都市ニンビンを結ぶ国道10号線 (いずれも北部ベトナムの主要幹線道路) を整備し、対象地域の物流の効率化をはかる事業。車中視察。
バイチャイ橋建設事業 (円借款)	国道18号線中間地点のバイチャイ湾に斜長橋およびアプローチ道路を建設し、ベトナム北部全体の開発を促す事業。橋を視察。
ファーライ火力発電所増設事業 (円借款)	既存のファーライ石炭火力発電所に隣接し、新たな石炭火力発電所を建設し、電力需要の増加するベトナム北部に安定的な電力供給を行う事業。車中視察。
ホアビン総合病院改善計画、ホアビン省保健医療サービス強化プロジェクト (無償資金協力、JICA技術協力)	ホアビン省において、省総合病院の技術棟や医療機材の整備に加え、リファラルシステムの再構築や医療従事者への研修などを行い、ホアビン省全体の保健医療機関の能力向上をめざす事業。ホアビン省総合病院およびダバック郡病院を視察。
第7次国別プログラム (国連人口基金 (UNFPA) 支援)	ベトナムのリプロダクティブ・ヘルス (性と生殖に関する健康/権利) および人口政策を実施するために、中央省庁や関係機関、さらに重点地域として選択された8省の能力向上のための事業を行うプログラム。「リプロダクティブ・ヘルス」および「人口と開発」を主要テーマとしており、その中にはジェンダーの視点も組み込まれている。フーター省女性連合本部、青少年連合運営のカフェ (ヴィエト・チー市)、地域住民の会合、チーダム地区ヘルス・センターを訪問。

—ベトナムは初めてとのことですが、ベトナムの印象はいかがでしたか。

有森 今回視察した限りでの印象ですが、これまで私が UNFPA の親善大使として訪れたアフリカの国と比較すると、貧困による深刻な悲惨さはないのかなという印象を受けました。もちろん、ベトナムもいまだ途上国ですが、アジアの他国と比較してもある程度のレベルに達しており、人々も皆真面目でポテンシャルの高い国であると感じました。

—今回、複数の円借款事業を見ていただきましたが、印象をお聞かせください。また、一番印象に残ったことは何ですか。

有森 円借款支援ならでは大規模な事業を見て、こういった“ハード”の支援もこれこれが必要であると強く感じました。大きなインフラが整っ



バイチャイ橋をバックに

てこそ多くの人が助けられるという事実を自分の目で見ることにより、ODA 事業を身近に感じることができるようになりました。一番印象に残ったことは、円借款事業の規模 (額) の大きさです。私が実施している NPO の事業とは3桁ほど異なり、その規模の大きさにまず驚きました。そして、その資金を用いて建設した、例えば橋などの大きな建造物を見て、改めてその規模・インパクトの大きさを実感し、一つの事業が、やや大きさに言えば国 (経済など) を動かすに足るものであるとの印象を受けました。

—今回の視察では、円借款事業のほか、JICA (国際協力機構) による技術協力プロジェクトや有森さんが親善大使をされている UNFPA の事業など、異なるタイプの事業も視察されましたが、いかがでしたか。

有森 私は2002年より UNFPA の親善大使をしておりますが、その関係もあり、母子保健、HIV/エイズ、ジェンダー問題などに個人的な関心は高いです。今回、貧困層の割合の高い省*の基幹道路や灌漑施設を整備するプロジェクトを視察し、受益者の声を聞く機会を持ちましたが、こういっ

た“ハード”が間接的にベトナムの母子保健医療の状況を改善させていることがわかりました。JICAが支援している省病院と郡病院の間の省道が円借款によって整備され、移動時間が2～3時間から30分に短縮されたという点は、まさに“ハード”と“ソフト”が一体となってサポートしている良い例だと思います。また、こういった“ハード”の事業には、使う側の人間が適切に設備を利用できるよう、必要なソフト支援が同時に提供されることが重要であると、強く感じました。その際、組織にとらわれず、ソフト支援を得意とする現地NGO/NPOも活用するなど、さまざまなアクターがそれぞれの強みを発揮し、連携して、より良い事業をより早く作り上げていくことが大切なのではないでしょうか。その点をもっとしっかり実施する、または実施しているのであれば、アピールしていくことが重要だと思います。

※省は地方行政区画の名称(日本の県に相当)。その下に郡が設けられている。



ホアビン省病院で歓迎を受ける有森さん



UNFPA支援事業(女性連合の活動)にて挨拶する有森さん

—日本のODA(全体)についてどのような感想をもたれましたか。視察前後で見方が変わった点はありましたか。また、今後、日本のODAに期待することは何でしょうか。

有森 実は、今回円借款事業を視察する前までは、ODA事業全般に良いイメージを持っていなかったのですが、ODA事業が現地の多くの人にとっても役に立っていることを目の当たりにし、その重要性を認識するとともに、非常に嬉しく思いました。ただ、毎年多くのODA事業を実施しているかと思いますが、被援助国自身の力で本当に実施できないのかといった点は、見極められているのでしょうか。援助するものもされる

のも当たり前という状態になっていないでしょうか。ODA事業のみならずNGOやNPOの活動も、“かわいそうな人々を援助するもの”という善意が基本となっているため、やって悪いはずはないとの考え方が多勢かもしれません。しかし、そのような考え方があまりにも強く出た“善意”ほどやっかいなものはないと私は思います。時に押付けになっていることもあるのではないのでしょうか。だからこそ、一度立ち止まって本来の目的を確認することは大切です。私は、自分の運営しているNPOの活動が、将来的にはなくなることをめざしています。本来であれば、このような救いの手を差し伸べる活動など存在しない世の中が理想なのですから。

それから、円借款事業は非常に多額かつ膨大な時間を割き、世の中の役に立つことをしているのですから、現地に行かないと理解されないというのではなく、日本にいる一般国民にも簡単に理解されるような広報に努めていくことが重要です。特に、次代を担う子供たちにとってわかりやすい説明や積極的な開発教育が必要だと思います。私は、競技生活の経験を生かして、マラソンイベントを通じた情報発信などを行っていますが、たとえば円借款の場でも、現地の人々や日本にいる国民にとっても円借款事業を身近に感じてもらえるよう、また、作ってくれた人のことを考えてもらえるよう、橋の開通式などにあわせてイベントを開催するのも一つの手だと思います。そして、そのような場で交通ルールのワークショップなどを開催し“ソフト”支援をするということもできるのではないのでしょうか。



フォンマオ灌漑の貯水池付近で農家の女性に話を聞く

—今回の視察を通じてどのようなことを日本人に伝えたいですか。

有森 日本人にとっては当然のように使われているものが、途上国では非常に貴重なものであり、そういったものを日本の支援により提供できているという現実をもっと知ってほしいです。そして、それを当たり前と思える幸せ、豊かさを感じてほしいと思います。日本も戦後、世界銀行の支援を得て東海道新幹線や東名高速を建設した事実を知らない日本人は相当多いと思いますが、今の日本がここまで発展したのも外国からの支援の賜物であることを理解し、現在日本が行っているODA事業の大切さも理解してほしいと思います。私も、今後、講演活動等を通じて、少なからず日本のODA事業について国民に理解してもらえるよう努めたいと思います。